

ナビゲーター

ジョン・カビラさん

テレビでも活躍されているジョン・カビラさんだが、やはりラジオ番組のファンは多い。気さくな人柄と独特のボイスが織り成すトークは、リスナーに元気とやすらぎを同時に与える。その人気の秘訣に迫ろうとしたものの、気が付けばトークに引き込まれてしまっていた。さすがである。

（聞き手・構成：町田 弘香，水落 一隆，伊藤 敬史）



——今日はお気軽にお話しただければと思っております。

はい、お願いします。漢字は違ってても、同じ「ホウソウ」界ですもんね。

——カビラさんの声って、ラジオで聞くと同じなんですね。

この声しか出せませんから（笑）。

——あらためまして、J-WAVEの開局25周年、おめでとうございます。

ありがとうございます。「光陰矢のごとし」ですね。開局当時は、視聴者の方からのコメントは、ファックスでいただいていたのが、いまや「Twitter」ですからね、時代の変遷を感じますね。

——放送されている最中にも、どんどん「Twitter」の反応が来っていますよね。

そうなんです。ソーシャルネットワーク（SNS）と非常に親和性が高いメディアなんですよね、ラジオは。デバイスの画面を操作しながらでも、聴けますからね。こういう時代になって、ある意味では、テレビよりも強みを感じていますね。

——テレビの場合は、「Twitter」と時々リンクしている番

組がありますけど、それは単にポップが画面の下の方にアップしてくるだけで。

模索の途中なんでしょうね、映像メディアが、どういうふうにSNSと付き合っていくのかというのは。

ただ本当にこの25年で変わったのは、アーティストの皆さん、情報を発信する皆さんが、パフォーマンスにしろ、音楽にしろ、自分でツールを持つ時代になりましたよね。以前は、例えば事務所やマネージャーが綿密にプロモーション計画を練り上げていましたが、特に欧米では、そういうところから自由になっていますよね。また、自由になっているという演出ができる時代になりましたよね。

例えば、ジャスティン・ビーバーが「YouTube」に映像をアップして、それに火がついて、ほかのアーティストがこの子いいねということですからすぐ連絡を取って音源を作るというのが、もういとも簡単にできるようになって、その後そういうツールを使いながら、ファンの皆さんとのダイレクトの交流が広がっていくという部分はすごいんですよね。

逆に従来では考えられないような画像を普通に流してしまう時代になってきて、驚いていますね。時々不用意な発言をしてしまっ、その後、いわゆる炎上するということもありますけど、いや、うまく使ってい

るなと思いますね。だから、メディアの在り方とか人々のつながり方の変遷というのは、本当にこの25年は強烈に感じていますね。

——カビラさんは、番組の最初に「グー—ツモーニントキオ！」ってシャウトしますよね。あれはいつからですか。

初日からです。最初はそんなに伸びてなかったかもしれませんが、だんだん伸びていきました（笑）。

——あれを聴くと元気が出るんですけど、カビラさんのテンションが低くてシャウトするのがつらい朝は、ないんですか。

いや、あれで自分を鼓舞しているんです。

——なるほど。では、その直前までうなだれていても、あれで、元気が出るんですか。

普段、うなだれることは、ないですけどね。“ドーハの悲劇”の時くらいですかね。

——そのときは、つらかったんですか。

あのときはつらかったですね。半分泣きながら放送していたような気がしますね。茫然自失。

——番組の最後に「Have a great weekend, and peace.」とおっしゃいますが、最後のピースという言葉が印象的です。

特に湾岸戦争の後から、顕著になっているような気がしますね。本当に、平安と平和でありますようにという願いですね。ご愛聴感謝と、あとピースですね。そうあってほしいという単純な願いです。

——カビラファミリーは沖縄のご出身ということと関係がありますか。

そうですね。基地の島です。僕は東京に来るまで沖縄で生まれ、育ちましたし、そういう思いはあるんでしょうね。

——カビラさんが担当されている朝の時間帯は、いろいろな方が放送を聴いていらっしゃることを考えると、どこをどう狙えばいいのかが難しそうなんです。

よく皆さんに質問されることですね。誰がターゲットなんですか、どういう顔を思い浮かべながらしゃべって

いるんですか、と。

でもそれで思い悩み始めて、このテーマはたぶん女性向けだから、そこに訴求するようなおしゃべりをしよう、などと思ったことは一度もないですね。まあ、一種の思い込みで、しゃべっているのかもしれませんが。

僕の話が伝わっているかどうかの、1つのリトマス試験紙はエンジニアさんなんです。マイクに向かっていすけれども、右か左にガラスがあって、そこに副調整室があって、そこにまず入ってくる音声を調整する調整卓があって、その調整卓を操作するのがエンジニアさんなんですけど、そのエンジニアさんは、原稿は渡されていないくて、進行表しか見ていないんですよね。ということは、アイコンタクトができる最初のリスナー、まあ、理論上ほぼ同時に皆さんも聴いてくださっていますけど、エンジニアさんが僕の最初のリスナーなんです。その方の表情を見ながら、今のは伝わらなかったかなというのを推し量りながらやることはありますね。

もちろん伝える内容にも、単純なもの、複雑なものという濃淡がありますから、四六時中見ているわけではないんですけど、自分の中で、今で通じるのかなという思いがよぎるときとか、そうやって見えていますね。

——なるほど。

テレビではそれはできないですね、カメラを見なきゃいけないので（笑）。

——分かりやすく伝えるための言葉の選択はどのようになりますか。

基本は、丁寧語です。ただ、はっきりリスナー層が絞り込める時間帯というのはあります。深夜番組などは、小学生は聴いてないでしょうし。だからそれなりの気さくさがあり、リラックスしている方が生身の人間らしいですね。

四角四面の丁寧なしゃべり方をされても、よそよそしさしか漂わない時間帯もあれば、基本的には丁寧に分かりやすくという時間帯もありますよね。それは時間帯の要請、番組のカラーの要請、プラス自分のカラーですね。

自分のカラーは、濃くでるときも、薄いときもあると思いますが、その方が、僕自身、楽しめるんです。

——自分のカラーの濃淡はわざと出しているのですか。それとも自然に？

エゴイスティックなことを言えば、その方が、僕が面白いんです。逆に、楽しませているという上から目線とか、俺がうまく図ってやっていると思うよりは、やっていること自体が僕が楽しいとか、刺激的だとか、おかしいよねこれという方が、僕はできるんですよ。

——自分も楽しんでいるときの方が、リスナーも楽しんできているなという実感はありますか。

そうであれば、幸せですね。今は「Twitter」ですぐに反応をいただくので、しめた、と思うこともあれば、こういうところがちょっと足りなかったのかなと思うこともありますね。

——え？ 放送時間中に「Twitter」とかもご覧になっているのですか。

はい。画面を2つ見えています。

——そうなんですか。何の画面と何の画面ですか。

「Twitter」の画面と、あとは番組のホームページですね。番組のホームページ上で、A曲ですか、B曲ですか、どちらを聴きたいですかということでクリックいただいているので、常にその画面は見なきゃいけないですし、それから、例えば海外の通信社のニュースサービスの画面とかも見えていますね。

——そういう情報を処理しながら、おしゃべりもするんですよ。

いや、さすがにしゃべっている瞬間は基本の原稿があって、音楽がかかっている間が、画面を見られる状況です。

そういう意味ではラジオは非常に自由ですよ。テレビは2分半でとかいう感じで全部決められていますし、放送局によっては、CMが自動送出で、決まった時間になったらそのままCMになっちゃいますから、それまでに上げなきゃいけないとか。また、基本、映っているので、息継ぎをする時間もないですよ。そのままの勢いでいくしかないという。番組にもよりますけ

どね。そういう意味では、時間の使い方がラジオは自由ですよ。

そういう部分を、リスナーも感じ取っていらっしゃるでしょうし、また、毎日の視聴習慣というのは僕らが望んでいるところなんですけれども、タイムスタンプの機能があって、このコーナーが始まるとだいたい何時だかと皆さん体感されていますから、ラジオは面白い機能が満載ですよ。

——11時のシャウトも、皆さん待ち構えていらっしゃるんじゃないですか。

そうですね、はい（笑）。奇妙な視聴習慣をつくってしまいました。

——11時ですからね。ちょっと微妙なタイムスタンプですけど。

そうなんですよ。

——カピラさんは、弟の慈英さんも、サッカーというイメージがすごく強くて。

そうですね。もともとラジオの仕事をいただいたのも出会いの産物だったんですけど、サッカーも、僕は、サッカーの一ファン、元選手でもないし、サッカーをずっと追いつけているジャーナリストでもないし、何なんでしょうね。一ファンが、こんな場を与えられているというのは、相当まれでしょうね。

今J-WAVEが25周年、Jリーグが20周年ですが、Jリーグが発足するということが決まってすぐに、J-WAVEで勝手に盛り上がっていたわけですよ。いよいよだ、という感じで。サッカーコーナーがあったわけでもないんですけどね。で、異様に喜んでいる出演者がいると、それを聴いてくださっていた方々がいて、面白いじゃないかということでお声掛けいただいたのが始まりなんです。

当時、僕はラジオなのでということで、ナレーションだけにさせていただいて、顔を出す出演はお断りしてたんですけども、そうこうしているうちに、三浦知良選手がセリエAに行ってジェノアでデビューするという。そうしたら「カピラさん、カズもチャレンジしているんだから、カピラさんもチャレンジして」と。



この仕事を続けさせてもらって、
僕も知らない僕の扉を
開けてくれるチャンスが
与えられるのが夢ですかね。
これまでがそうであったように。

ジョン・カビラ

——いや、訳が分からない説得ですね、それは（笑）。

それはたぶん法廷では通用しない論理ですよ。

でも、それで、そうですね、みたいな感じになってしまい、それで『セリエAダイジェスト』という番組に出させていただくことになって。いまだに、いいのかな、と思っている自分がいますけどね。本当に一サッカー好きの男が、こんなことになっちゃったという。

——もともとのサッカーとの最初の出会というのは？

『三菱ダイヤモンド・サッカー』ですね。

——そうですか。

そうです。メディアから入っていますね、僕は。

高校時代アメリカンスクールだったので、いわゆるセレクションがあるんですよ。日本だと、民主的に、サッカー部に入りたければ100人でも入れるという、まあ、民主的なのかどうなのかというのは、クエスチョンマークはありますし、サッカー部に入っても公式戦に一回も出られなかったみたいなこともあり得るんですけど。アメリカンスクールはセレクションがあるので、22人かな、そこに入るのは無理ですよ。少年団の経験も何もなくて、好きでやっているだけの高校生が入れるわけがない。

それで学内のサッカー好きが集まるという、セミ部活で、Aチームにはちゃんとしたコーチ経験のあるコーチがいて、Bチームは、なぜかスペイン語のベラスコ

先生が指導するという、この人がサッカー指導？ でもスペイン人だしなと（笑）。

ICU（国際基督教大学）に入ってから、学内リーグで楽しませてもらって、『三菱ダイヤモンド・サッカー』を見るようになって、弟がジュニアユースで読売クラブに入って、JSL、日本リーグの、読売クラブ、日本鋼管とかあいう時代ですよ。それで、大学時代、1979年ですよ、ワールドユースというFIFA主催のたぶん日本初の大会があって、もうそれで火がつけましたね。

その前の年の1978年に、NHKが初めて生放送でワールドカップ、アルゼンチン大会の決勝を放送したんですよ。

——オランダ戦ですね。

オランダ戦。マリオ・ケンペス、マタドール。食い入るように画面を見ていたら、空を、舞っているんですよ、白いものが。それで慈英に、さすが南半球だな、冬だな、雪が降っているぞと言ったら、紙吹雪だった（笑）。そのくらいワールドサッカーが遠い時代ですよ。

——そうですね。

そうですよ。1978年ワールドカップ、1979年ワールドユース、ワールドカップ予選と続いて、木村和司さんの伝説のフリーキックを見て、完全にはまりまし

たね。それでよく見に行くようになって、メディアに出させていただく仕事につき、Jリーグ発足、これはすごいぞということで勝手に盛り上げていたら、お声が掛かってという。何なんですかね、これは。夢のようですね、本当に。

——さっきおっしゃった、自分が楽しいのがお仕事になるという。

ええ。でもそれが仕事になっちゃうと、何だよ、とは言えないところは、あるんですよ（笑）。

——言っちゃうとどうなるんですか。

いや、中途半端に言えないじゃないですか。本音だと、とても紙面に出不せないような言葉しか出てこないじゃないですか。くやしいとか、残念、くらいですよ、言えるのは。でも本当は一サッカーファンとしてはもう、机壊すぞ、みたいな思いですよ。

——そうですね。隣近所に憤怒の叫びが聞こえるぞという感じにもなりますから。

はい。もしくは例えば狂喜乱舞して、もうみんなで抱き合っちゃうとかなっちゃうわけですよ。だからそれをぐーっとおさえて（笑）。

——おさえて、おしゃべりをするんですね。

まあ、仕事ですからね。番組をプレゼンテーションする1つのハブになっている以上、感情の赴くままにいくというわけにはいかないですよ。それをやってしまったら、機能を果たしてないということになるの。

——スポーツ紙は喜びそうですけど。カビラ、暴走、みたいな。

そうですね。カビラ、切れた、みたいなね。

——実はかなりつらいお仕事なのかもしれないですね。

もう最高に幸せで最高にきついという、そんな感じですよ。でもこれは一ファンの偽らざる単なる思いなのです。

——カビラさんの夢はなんですか。

夢。うわあ。来ましたね。何だろう。結構目先の目標でいっぱいですね。夢、そうですね。ラジオ局ができたらいいなとか、昔はよく思っていましたけれども。

——ラジオ局？ ご自分のということですか。

はい、自分で。自分でラジオ局ができたらいいなとか思ったりもしていましたけれども、たぶん経営的なセンスはないでしょう。それは置いておいて、夢ですか。家族の将来も当然そうですし。広い意味では、平安と平和があってほしいなとか、大きく言えばそういうことなんでしょうね。

あとはこの仕事を続けさせてもらって、僕にも知らない僕の扉を開けてくれるチャンスが与えられるのが夢ですかね。これまでがそうであったように。レコード会社を辞めて、こういう仕事が与えられて、じゃあ、次はどんな。自分をどんなに客観視しようとしても、カビラがどういうふうに見られているのかというのは、カビラである以上分からないですよ。皆さんがどういふふうにご覧になっているか、それはお一人お一人違うでしょうし。

表現の場をつくっている皆さんが、ここにカビラがいたらどうなるんだろう、まだやってないみたいだけど、どうだろうということを思い続けてくださったら、ということですね。それで「えっ、僕ですか？」というのをずっと言い続けられると。それは理想でしょうね。「僕なんですけど、できるって思われちゃうんですか」というような話が続けられたら幸せでしょうね。これは仕事の夢ですけど。

あとはありきたりですけど、自分も健康で、家族も健康で、家族一人一人がそれぞれの思い描く将来を描くのか、それともまた違うふういろいろな扉があって、本人が開けるのか、それとも開けてくれる人がいるのかということで、広がっていくという。それが夢でしょうね。

プロフィール じょん・かびら

1958年生まれ。沖縄県出身。CBS SONY（現Sony Music Entertainment）入社後、1988年のJ-WAVE開局と同時にナビゲーターに転身し、同局朝の看板番組を担当。2005年にギャラクシー賞（DJパーソナリティ賞）を受賞。ラジオ以外にも、テレビの司会・ナレーション、CM、映画、舞台などの幅広い分野で活躍。サッカー通としても知られる。俳優・タレントの川平慈英氏は実弟。